

河口堰魚道改良基本構想 & 遠賀川への提言



平成 21 年 2 月

～ 河口堰魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代に繋ぐ懇談会 ～

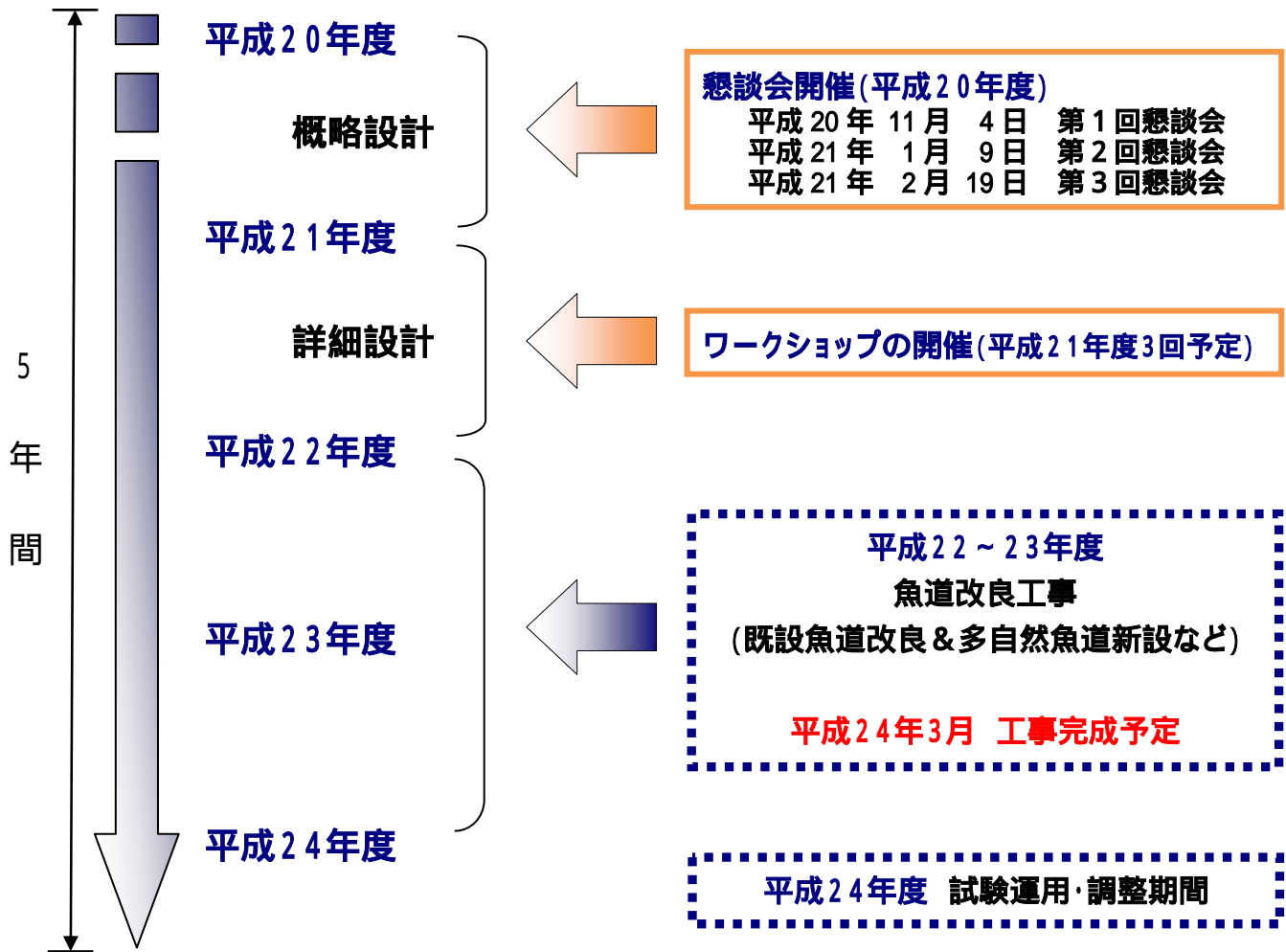
懇談会の目的、成果

遠賀川河口堰魚道改良事業（総合水系環境整備事業（遠賀川河口堰）平成 20 年度～平成 24 年度予定）を着手するにあたり、遠賀川河口部における望ましい魚道整備のあり方について、学識者、住民代表など色々な立場の人達と意見交換を行うため、「河口堰魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会」（座長：小野勇一北九州市立いのちのたび博物館長）を平成 20 年 11 月に設立、3 回の懇談会を開催しました。

懇談会では「河口堰魚道改良基本構想」をまとめるとともに、河口部のみならず、遠賀川水系全体を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋いでいくことを目指し、「望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐための提言」をとりまとめました。



河口堰魚道改良事業スケジュールと懇談会の開催



H 2 1 年 2 月 の 第 3 回 懇 談 会 の 様 子 (模 型 や C G を 使 っ て の 議 論)

河口堰魚道改良基本構想

基本的な考え方（4原則）

1)遠賀川の原材料を活かす

- ・遠賀川にもともとある材料を活かす。

2)自然の線形を活かす

- ・人工的な直線、曲線は可能な限り避ける。

3)草付きの河岸を形成する

- ・子ども達が遊ぶ場は草付きが多い。

4)河口干潟を形成する

- ・河口域の生物相を多様化する。



目 標

“川と海をつなぎ、魚たちがのぼりやすく、生き物も人も集う魚道を目指します。”

すいすいゲート

遠賀川水系の魚たちにとって遠賀川の最下流にある河口堰魚道は、川と海とをつなぐ重要な魚道です。色々な種類の魚たちが、いつでものぼることが出来るように、自然のせせらぎのように浅くておだやかに流れるもの、深いところが好きな魚のためのもの、ゆるやかな階段式のものとして3種類の魚道をつくります。

いきもの空間

人工的な河口堰周辺に、草や昆虫などの生き物が棲み、子どもたちも潮の満ち引きする河口の川の様子を体験や学習ができるように、魚道のひとつを自然に近いように工夫したり、河口干潟をつくったりします。



基本方針

1 現魚道の改良

- ・現魚道の改良を行い、水位や流量条件、魚の遡上特性などに応じた小型魚用と大型魚用の2種類の魚道を整備する

2 多自然魚道の新設

- ・汽水と淡水を緩やかな変化によってつなぎ、稚魚や底生魚などのような現魚道を苦手とする魚ものぼれるような緩勾配の多自然魚道を整備する。
- ・多自然魚道は、河口域の水辺のビオトープとして整備し、“魚の移動”だけでなく、本来あるべき水の流れや生き物、自然環境を再生する。

3 河口干潟の整備

- ・海（塩水）と川（淡水）の緩衝帯、遡上降下する魚の誘導や待避所（機能）として、また、河口域の生物相の多様化を目指して河口干潟を整備する。

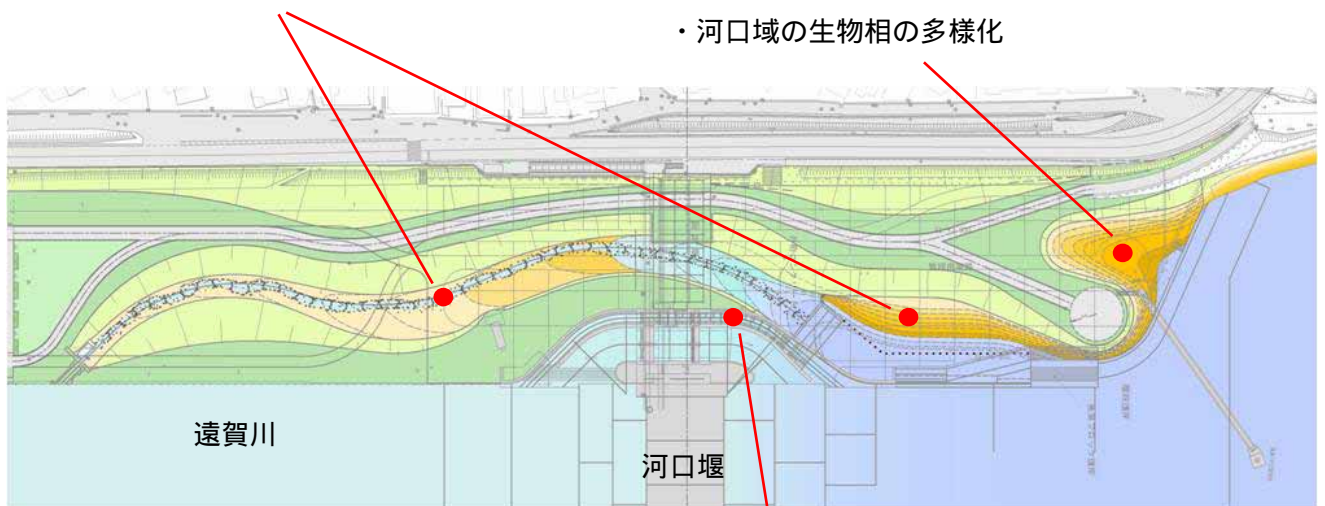
魚道改良整備方法と施設全体配置

2 . 多自然魚道、干潟の新設

- ・遊泳力の弱い魚、定生魚のための魚道
- ・親水空間として整備

3 . 入江干潟の整備

- ・遡上ルート確保、遡上魚の誘導、待機・避難所機能の確保
- ・河口域の生物相の多様化

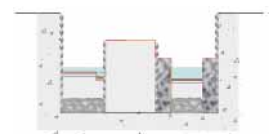
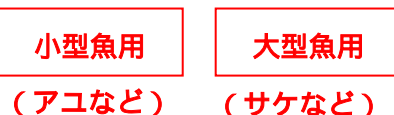


基本的な考え方（4原則）

- ・遠賀川の原材料を活かす
- ・自然の曲線をできるだけ活かす
- ・草付きの河岸をできるだけ再現する
- ・狭くとも干潟を再現する

1 . 現魚道改良

大型魚用と小型魚用の2条に分割



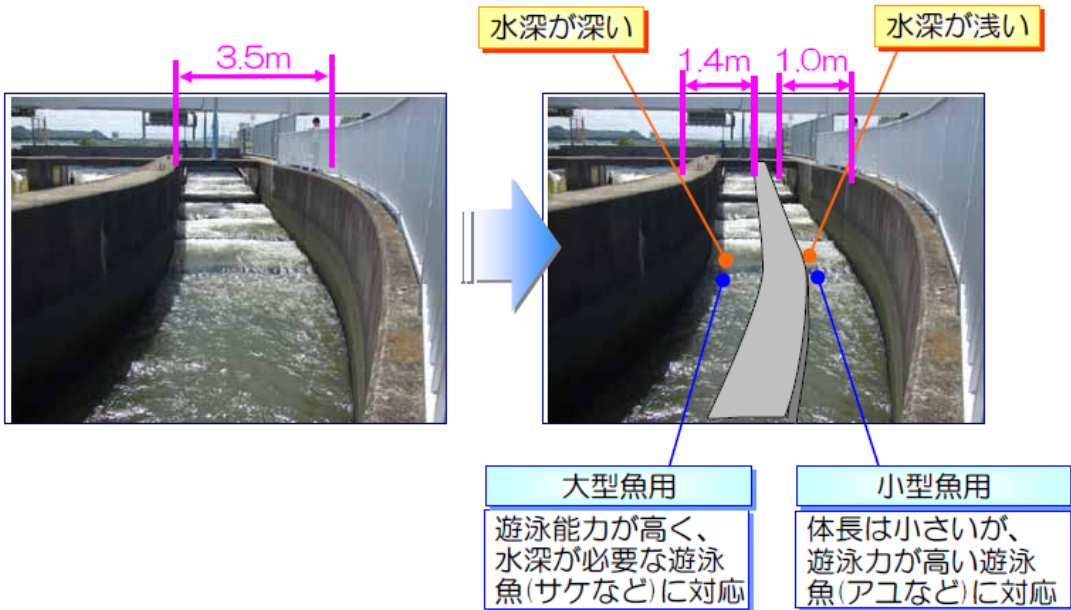
改良整備後のイメージ

H21年2月時点のイメージであり、完成時とは異なる場合があります。

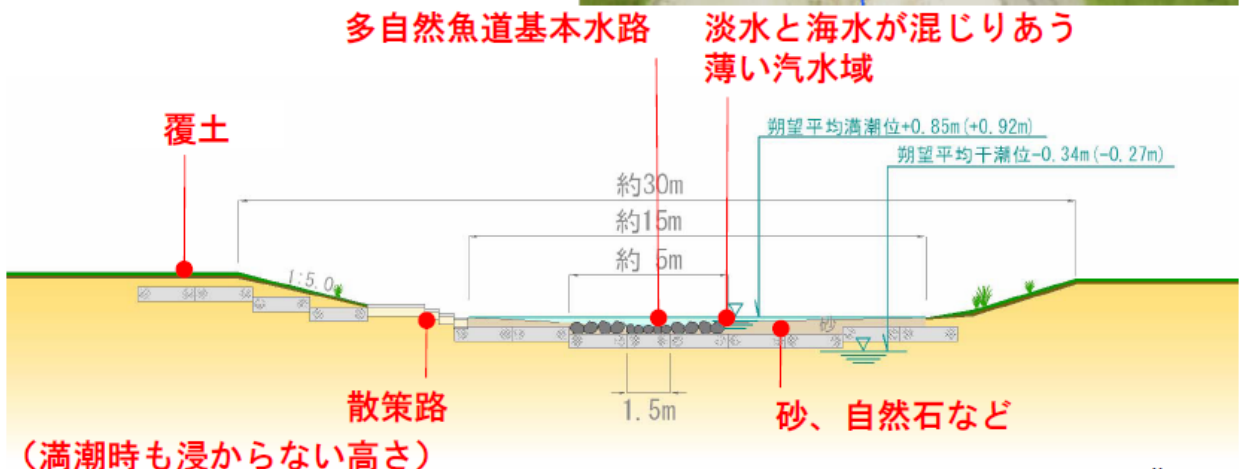
【1. 現魚道改良イメージ】

現魚道：1条

改良後：2条



【2. 多自然魚道整備イメージ】



【3. 河口干潟整備イメージ】

薄い汽水域、砂干潟
河口域の生物相の多様化
(ハゼ類など絶滅危惧種の再現が期待)



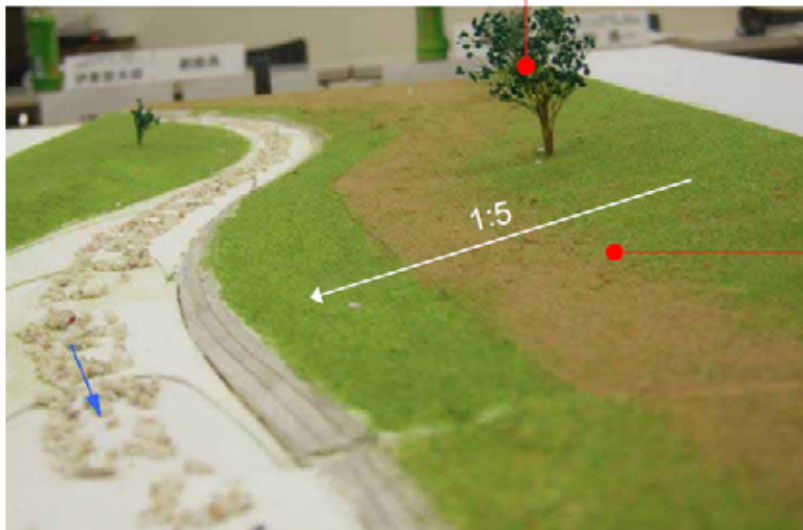
遡上する魚を誘導、待避所・休息場機能
遡上ルートの連続性確保

干潟が維持できる高さ



【4. 高水敷整備イメージ】

樹木による緑陰の形成



憩いの場、道路からの
アプローチ性向上

望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐための提言

～ 河口堰魚道改良基本構想のとりまとめにあたって～

はじめに

遠賀川は、かつて石炭産業を支え、日本の近代化に大きな役割を果たしましたが、その陰で「ぜんざい川」と呼ばれるほど黒く濁り、近代化が進む中で水質が悪くなっていくなど、いつしか遠賀川の存在は人々の心の中から薄らいでいき、良好な環境や親水利用には遠い存在の川でした。

しかしながら、その後の人々の環境意識の向上と鮭をシンボルとした流域各地での住民団体による環境、水質保全活動や清掃活動、および河川管理者等の行政による各種取組みにより、現在ではアユも遡上するほど遠賀川の水質も改善してきました。

このような背景の中、本懇談会は遠賀川河口部における望ましい魚道整備のあり方について検討し、“生き物も人も集う魚道”を目指した「河口堰魚道改良基本構想」をとりまとめたところでありますが、河口部のみならず、遠賀川水系全体に対する想いや次世代での遠賀川のあり方についても色々と意見が出されました。

本提言は、そのような各委員の遠賀川水系全体に対する想い、次世代での遠賀川のあり方について、“望ましい遠賀川を次世代へ繋いでいくための提言”としてとりまとめたものです。

遠賀川が美しく親しみのある魅力あふれる川になり、愛着のある、未来に誇れる遠賀川を次世代に繋いでいく上で、本提言がそのきっかけの一つとなれば幸いです。

平成21年2月

河口堰魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会

1. 遠賀川の水環境上の問題

(1) 自然環境に関する課題

- ・ 遠賀川河口堰などの河川区域内の横断的な構造物や、画一的に整備された護岸などにより、遠賀川本来の環境が改変され、魚類等が川と海を行き来する妨げとなるなど、生き物の生育環境として厳しい条件となっています。
- ・ 河口域では淡水と海水の緩衝域が失われるなど、魚類等の本来の営みを妨げ、生活しにくい川となっています。

(2) 河川空間利用に関する課題

- ・ 急な勾配の護岸は水辺から人を遠ざけ、子どもたちも安全に川遊びが出来ないなど、人にとっても優しさのない川となっています。
- ・ 特に河口域の直立した護岸は、子どもたちが鮭を放流する際に落下する危険性があるなど、川に安全に近づける場所が少なくなっています。
- ・ 河口堰魚道の周辺で魚釣りをしている人が見られるなど、公共のモラルやマナーの欠如がみられます。

(3) 水利用に関する課題

- ・ 遠賀川は、「山が急峻で浅い」といった地形の特性などから、どちらかというとも水量が少ない河川ではありますが、極めて高度な水利用がなされています。このため、平常時の水量が少なくなることが多く、魚類等の移動の妨げとなっています。
- ・ 遠賀川の水質は生活排水による水質汚濁が顕著で、九州内でも常にランキングワースト上位に位置しています。最近では汚水処理施設整備等の向上と水環境改善の意識の向上等により改善の方向に向かってはいますが、未だ水質が悪い支川も残っています。

(4) 維持管理に関する課題

- ・ 遠賀川流域ではゴミの不法投棄が多く、毎年、洪水後には大量のゴミが河口堰まで流れ着いています。また、河川内のゴミは水環境を悪化させるだけでなく、遠賀川の景観や印象も著しく損ねています。

2 . 望ましい遠賀川の姿

- ◆ 魚類等の生き物が棲みやすく、豊かで美しい川
- ◆ 地域に親しまれ、癒される居心地のいい水辺空間
- ◆ 川とふるさとを大切に想う心を養い、人を育てる環境
- ◆ 地域が一体となって守り、育む、愛着の感じられる川

3 . 望ましい遠賀川を次世代へ繋いでいくための提言

(1) 自然環境・河川景観等に関する提言

遠賀川の最下流にある河口堰魚道は、遠賀川水系の魚たちにとって川と海とをつなぐ重要な魚道です。河口堰魚道改良においては、色々な種類の魚たちがいつでものぼることが出来るように、自然のせせらぎのように浅くておだやかに流れる魚道、深いところが好きな魚のための魚道、ゆるやかな階段式の魚道など、色々な種類の魚たちがのぼりやすい魚道の整備を提案しています。

また、人工的な河口堰周辺に、草や昆虫などの生き物が棲み、子どもたちも潮の満ち引きする河口域の様子を体験や学習ができるように、魚道の一つを自然の川に近くなるように工夫したり、河口干潟をつくることも提案しています。

今回の魚道の整備をきっかけとし、遠賀川水系全体において干潟やワンドを保全・再生し、落差を解消するなど、本来あるべき水の流れや自然環境となることが重要です。

また、直線的なコンクリート護岸や直立の河岸をできるだけなくし、遠賀川の原材料を活かして緩やかで自然な曲線を創るなど、遠賀川本来の河川景観を保全・創出し、美しい遠賀川を次世代に繋いでいくことが重要です。

(2) 河川空間利用に関する提言

河口堰魚道改良基本構想では、コンクリートで覆われた河川敷に多自然魚道を新たに整備し、良好な自然環境を創出して人が安らぎ、学び、遊ぶことができるような、魚たちにも人にもやさしい河川空間を創出することを提案しています。

しかしながら、子どもたちを川に安全に近づけるためには、危険を知らせる標識やサイン、防護柵の設置など、子どもたちの安全性を確保する必要もあります。

川の豊かさ・大切さに加え、川の危険性などを子どもたちに正しく理解してもらうため、安全に水に近づき、触れて、観察できる水辺空間を流域全体に広げ、子どもたちの河川教育をさらに発展させ、次世代に繋いでいく必要があります。

また、改良後の河口堰魚道周辺を居心地の良い水辺空間として利用してもらうためにも、河口堰魚道周辺における魚釣りなどの利用規制、ルールづくりなども必要です。

(3) 水利用に関する提言

川に棲む魚類等の生き物たちの生息環境保全のため、上流から河口まで、水系全体にわたって豊かな水が流れ、流況が安定することが重要です。

大幅に水量を増やすことは不可能ですが、平常時の水量を増加させる方策として流域全体で保水能力を高める取り組みを推進するとともに、利水とのバランスを踏まえ、異常気象への対応など関係機関が調整を図っていく必要があります。

特に、今回整備される河口堰魚道は海と川をつなぐ重要な魚道ですので、その機能を十分発揮させるためには、魚道を通る水量を安定確保できるように努力していくことが大切です。

遠賀川の水質改善については、清流ルネッサンス（水環境改善緊急行動計画）により流域一体となって取り組んでいるところですが、なお一層、家庭からの生活排水による負荷の削減など、流域住民一人ひとりの水質改善に対する意識の向上と積極的な行動が必要です。

(4) 維持管理に関する提言

河口堰魚道の機能を保ち、居心地の良い水辺空間を維持していくためには、流下ゴミに対する対策や周辺の除草、清掃等の維持管理が必要です。同時に、利用者の安全性確保、啓発・教育支援活動等にも行政と住民が一体となって積極的に取り組むことが重要です。

また、魚道機能の向上のためには、住民主体のモニタリングも含めて流域全体で魚類等の生物に関する情報を共有するとともに、調査の繰り返しにより、情報の蓄積と改良効果の検証を行いながら、よりよい場を形成する必要があります。

ゴミ対策は河川管理者のみならず、住民自らの取り組みが必要です。地域との連携を図り、流域全体として意識向上を図るなど、ゴミのない美しい遠賀川を目指し、流域全体で改善策を実行することが非常に重要です。

おわりに

本懇談会では、海からの遠賀川への唯一の出入り口である遠賀川河口堰の魚道改良に関して様々な貴重な意見が出され、遠賀川に生息するすべての魚類等の移動に配慮するだけでなく、人が集い、安らぎ、水に触れて学べる魚にも人にも優しい水辺空間を創造することを提案いたしました。

特に、海（塩水）と川（淡水）の緩衝帯として、遡上降下する魚の誘導や待避所の機能として大変重要な河口干潟を同時に整備するとした提案は、全国的にも珍しく独創的であると自負しております。是非ともこの提案が実現し、将来にわたって適正に機能することを希望します。

遠賀川は、母なる川であり、流域に住むわれわれの貴重な財産です。現在よりもさらに美しく、望ましい姿の遠賀川を次世代に繋いでいくために、われわれ一人ひとりが川を守り、育む強い意志と行動が必要です。

河口堰魚道を考え、望ましい遠賀川を次世代へ繋ぐ懇談会
委 員

(敬称略、順不同)

- 小野 勇一 いのちのたび博物館長（北九州市立自然史・歴史博物館）
伊東 啓太郎 九州工業大学 准教授（遠賀川リバーカウンセラー）
鬼倉 徳雄 九州大学大学院農学研究院 助教
淵上 信好 遠賀川河川環境保全モニター
刀根 賢一郎 遠賀漁業協同組合 代表理事組合長
深田 祝夫 北九州地区・遠賀地区養鰻生産組合 組合長
大里 至 遠賀川に鮭を呼び戻す会
青木 宣人 遠賀川源流の森づくり推進会議 アドバイザー
鬼塚 やよい NPO法人遠賀川流域住民の会 理事
坂本 栄治 NPO法人直方川づくりの会 副理事長
荒牧 雄一 宮若川づくり交流会
松尾 一四 笹尾川水辺の樂校運営協議会 事務局次長
池田 敬一 芦屋町立芦屋東小学校教諭
齋藤 勝明 水巻町立伊左座小学校教諭
田中 政喜 嘉麻市副市長
安高 直彦 芦屋町副町長
吉田 俊幸 北九州市水道局長
津森 貴行 国土交通省九州地方整備局遠賀川河川事務所長

以上 18 名